

〈受け持ち事例 Bさん〉

Bさん もうすぐ100歳 要介護度3

高血圧 認知症

- ・ お話し好きで職員や利用者と良く会話している
- ・ 「腰が曲がっているから」と消極的な姿勢を見せることもある
- ・ 会話中に同じ話題を繰り返すことが多い
- ・ 手引き歩行でユニット内を移動していた

介護ニーズ・アセスメント

#1.少しでも背中を伸ばして100歳まで生きたい 健康で長生きしたい

Aさんは「今、99歳だから100歳までは生きたいね」「100歳になったら家族や知人がバンザイしてくれるから頑張らないと」とよく言っている。本人の考える健康観を聞いたところ、「昔のようにテキパキ動けるのが一番だよ」と仰っていた。

円背が進行し、肺が圧迫されるためか「息が苦しい」と訴えることもある。基本的に日常生活は自分で行っているものの、離床臥床や衣服の着脱ではすごくゆっくりと時間がかかっている。

手指や上半身のストレッチを働きかければ、可動域が広がり、今よりはスムーズに生活できるかもしれない。特に、曲がった円背に対して、脊柱を伸ばせるように、バンザイをするのに必要な筋肉を動かせるような稼働状態に促していきたい。自立度の向上を目指していきたいと考えた。

#2.自力で歩けるようになりたい 散歩したい

「1人でスタスタ歩いたほうが早いし楽しいよね」「暖かくなったら外を散歩したいね」とのこと。実習初期は手引き歩行で居室とリビング間の往復でしか歩行しておらず、このままでは歩行能力が低下するのではないかと考えた。実習中期から歩行器が導入され、歩行器で自立して歩くことが出来れば利用者のニーズが叶うのではないか。そのため、日常生活の移動時間や余暇時間で歩行器を見せて歩行への意欲を向上させることで自主的に歩いてもらえるように促していきたい。

介護計画実践過程 #1

・円背の解消・改善

→本人が背中を伸ばした時の可動域が広がる

・息苦しさの解消・改善

→定期的に「息が苦しい」と仰っているため、
息苦しさの解消・申告回数が減少する

①手指と上半身のストレッチを少量頻回で行なう。1日2～4回 歩行前や入浴前、入浴後、就寝前

1. 本人へ意向を確認する。承諾後、居室にて行なう。(本人)
2. タブレットorスマートフォンを使用してストレッチ動画を見せる(実習生)
動画を見ながら一緒に動きをする(本人)
ストレッチ中は本人の好きな音楽をかける(実習生)

1. 「暇だからね、全然付き合うよ」と了承していただいた。
2. 「腰がね、曲がっちゃってるから、伸びないよ」と笑いながらも背筋を伸ばしてくださった。
3. 「これの通りにやれば良いの？」とスマホの動画を見ながらストレッチを行っていた。
4. 「少しは伸びるようになったかな？」と言いながら背筋を伸ばしていた。
5. 「この時間はね、暇だからね、いつでも声かけてきていいよ」と答えて下さった。

介護計画実践過程 #2

歩行器を使用しての自立歩行
→職員補助なしで安定した歩行ができる

1. 職員や実習生の補助を付けた状態で歩行器を使用した散歩を行なう。少量頻回 食前や食後など

- ①本人の意向を確認する。承諾後、歩行器を持ってくる。(実習生)
- ②居室から出て、散歩ルートを決める(本人)
- ③歩行中は後ろから様子を見ながら腰に手を添える(実習生)
- ④背筋を伸ばしながら歩くよう声掛け(実習生)
- ⑤歩行後は水分補給をする(本人)

1. 「食後に丁度良いね」と笑いながら仰っていた。
2. 「今日はこの順番で、歩いて行こうかな」と仰っていた。
3. ゆっくりと散歩経路を歩いていらっしやった。
4. 「歩いているときは、こんなに背中伸びてるんだねえ」と驚いていた。
5. 「歩いた後はね、これが一番美味しいのよ」と水分を取られていた。

實習初期

實踐過程
前半

實踐過程
後半



学んだこと

・介護計画の作成、実践を通して学んだこと

→今回の介護計画の作成、実践を通して私はユニットケアにおけるスタッフ間の連携の重要性、利用者情報収集の重要性を学んだ。

今回の介護計画作成時に職員から利用者に関する情報（日頃の習慣や性格など）を頂かなければ十分な介護計画は作成できず、ユニットスタッフに介護計画を共有することで円滑に進めることが出来た。



・実習全体を通して学んだこと

→今回の実習で私は1人の利用者と向き合うことの大変さ、多職種連携の重要性、個別介護計画立案の難しさを学んだ。

今までの実習と異なり、その施設で暮らしている利用者1から関係性を構築していくことの難しさは特別養護老人ホームだからこそ学べる内容であったし、ユニット介護だからこそその看護師、栄養士、介護職員の連携の重要性というのは実習内で交わされていた日々の職員の会話や利用者対応から読み取ることができた内容でもある。

1人の利用者を対象とした個別介護計画立案の難しさは初めての経験というものもあるが、利用者の利益につながるように考えることは今後の自分の創造性を膨らませるために必要な経験になったと考える。